

「言語の表現過程に関する試論」

一般教育 辻 谷 忠 士

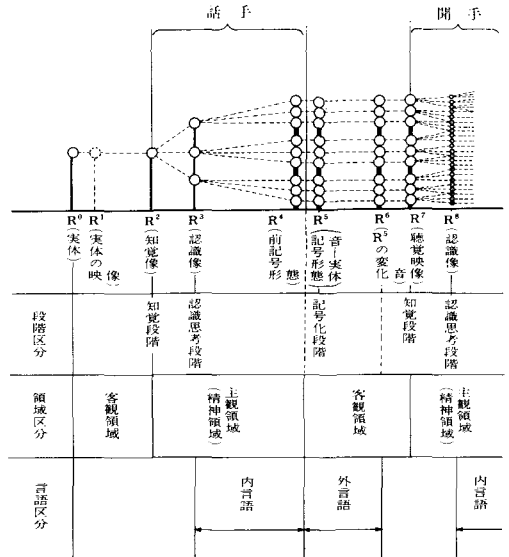
序 論

言語研究にとって、その研究対象である言語事実の特性の記述と、それを体系化できる普遍的理論の樹立とが、その使命と考えられてきた。前者においては、表現された言語——話された言語と書かれた言語——の具体的言語事実を分析し、その特性的諸構成要素を記述することであり、後者においては、前者で記述された言語事実の特性的諸構成要素から共通的特質を抽出し、分類し、そこから科学的（体系的）に説明できる法則を樹立することである。

この言語研究の方法によって、言語に関する極めて多くの知識が与えられ、多くの法則が生まれてきたのである。しかしながら、それらは凡て表現された言語についてであり、表現されるまでの過程(内言語)——感覚器官によって感知された実体が外言語として表現されるまでの過程（これを言語の表現過程と呼ぶ）——についての研究は、それに比較すると、極めて少なかった。それは言語の表現過程の研究対象が漠然とした、想像的、内的事実の範囲内にあるために、正確な資料と普遍的法則性が得られ難いという理由であるかも知れない。しかし、たとえ研究対象が客観性に乏しいといえども、人が言語によって思考し、言語によって表現し、言語によって自己を形成し、言語によって社会的拘束を受けることが自明の理と考えられている以上、言語の表現形態についてだけではなく、言語の表現過程についても研究されなければならない。むしろ言語の表現過程に対する正しい認識があってこそ、言語の表現形態の研究が始まるときえ思えるのである。これら二つの分野の考察と研究は共に言語の本質に関する重要な事柄である。それ故、この小論は言語の表現過程に関する理論を述べることを目的とする。

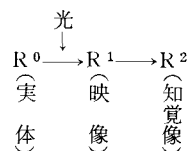
§ 1 言語の表現過程に関する理論

次の図は話手Sが実体Rを知覚して、それを聞き手Hに伝達し、それをHが知覚するまでの過程を拡大した



仮定図である。この図に従って、言語の表現過程を説明することにする。

話手Sは実体Rを感覚器官によって知覚する。この場合、知覚するのはRの像であってRそのものではない。換言すれば、光線の屈折や反射によって映し出されたRの映像が知覚されるのであって、Rそのものではないということである。(例えば、本物のリンゴと、形、大きさ、色等において全く類似した模造のリンゴを見て度々その区別を見分けられないのは、それらの映像を知覚するからである。あくまで実体である本物のリンゴと模造のリンゴとは異なっているのであるから、知覚段階において錯覚が生じているということになる)。従って実体Rを R⁰ とし、知覚する像を R¹ とすると、感覚器官によって知覚された像 R² は大体 R¹ と同じと見なすことができる。



$$R^1 \div R^2 \dots \dots \dots (1)$$

その後、直ちに R^2 は大脳に達して、そこで R^2 とは全く異なった R^3 になる。大脳は精神領域である。それは実体の存在する領域とは対照的である。 R^0 と R^1 の存在する領域は物理的に有形で、客観的な世界である。しかし、 R^3 の存在する精神領域は物理的に無形で、主観的、想像的な世界である。両領域の中間に存在して、 R^1 と R^3 とを連結する役目として機能するのが R^2 である。このように二つの領域が本質的に異なる性格であるが故に、そこに存在する R^1 と R^3 も全く異なった像であることは言うまでもない。精神領域における R^3 とは客観的な R^0 および R^1 を S の主観的認識像として意識されたものである。即ち、 R^3 とは知覚段階で別々に知覚された R^1 の形、色、音、味、臭等と、既に経験によって意識されている R^0 および一般的 R^0 の認識と、知覚時における S の心的状態の3つからなる総括的な認識像である。この3つを α とすると、

$$R^3 = R^2 + \alpha \dots \dots \dots (2)$$

α は S の R^0 および一般的 R^0 に対する認識の在り方が問われているから、 R^3 は S の個性、性格、経歴、生活、環境等が最も顕著に反映するところであると言える。この R^3 は新なる価値をもつ、新なる R^0 の思考材料として意識せられ、後に別の R^3 が現われた時に形成される認識像の α としての役目を担うことになるのである。この場合、認識像 R^3 が R^0 の思考材料として意識せられるということは、単に漠然とした説明できない像として意識されるということではなく、言語によって説明されうる像として意識されるということである。なぜなら思考とは言語によってのみなされるからである。しかし、言語といっても、精神領域における言語は他人に知覚される音声とか文字を持たず、通信を目的とする音声や文字をもった言語とは異なる。前者は内言語であり、後者は外言語である（ポール・ショジャール：「言語と思考」p. 10 参照）。

次にこの内言語によって認識された意識的存在物 R^3 は聞手 H に伝達される時、 R^3 とは別な形態に変形される。それは R^3 が記号形態（音声または文字）に変ることである。記号化とは有形化に外ならないので、精神領域における比較的自由的な内言語とは異なり、固定的な外言語の形態をとることである。外言語の性格は、内言語のそれが私的で、対自的で、主観的で、想像的で、無形であるのに対し、公的（社会的）

で、対他的で、客観的で、有形で、法則的である。このように両言語は全く性格を異にしているために、内言語から外言語へと機械的に移し換えることは、特別な場合（話者が両者を区別できない程に精神状態が混乱している場合とか、独り言の場合など）を除いて、ほとんどあり得ないのである。即ち、外言語になるには、その性格の背景となっている外的条件 (β) が必要とされるのである。外的条件とは聞手と話す場と行為および話手と聞手との関係等に関する事柄であり、外言語とはこれらを考慮した表現上の効果的言語形態を意味する。従って R^3 は外言語になる直前に、外的条件を考慮した、しかも直ちに、その形態で外言語に移し換え得る前外言語（又は前記号形態）とも言うべき R^4 の形態に整えられる。 R^4 はあくまで外言語の準備段階の形態であり、外言語の性格をもった内言語なのである。即ち、 R^4 は両言語の中間に位置し、二つを結ぶ役目として機能しているのである。

$$R^4 = R^3 + \beta \dots \dots \dots (3)$$

外言語として準備された R^4 はほとんど、あるいは全く直線的に、機械的に外言語化される。即ち、この図では、音声によって表現された言語形態 R^5 である。

$$R^4 \div R^5 \dots \dots \dots (4)$$

R^5 は、既に述べたように、公的であり、法則的であるが故に、 R^5 は S と H の間で理解できるものを指示していること、しかも R^5 は両者間で理解でき得る表現形態をしていることである。前者は意味に関する事柄であり、後者は統語および音声に関する事柄である。この R^5 は H にとって、有形化された、客観的な実体（もちろん実体 R^0 とは異なり、音声化された実体）である。 R^1 の場合と同様、 R^5 は正確に発音されていても、 S と H の間に空間的距離があるために S の口もとで発せられた R^5 の音波は様々な抵抗に会って、 H の聴覚に達する直前にある程度変化する。それは R^5 と全く同一ではないが R^5 と極似している音である。

$$R^5 \div R^6 \dots \dots \dots (5)$$

この R^6 が知覚されて聴覚映像 R^7 ができ、 H の大脳に達して R^8 が作られるが、その進行過程は S の場合と同様なので割愛する。

以上が R^0 という実体が言語として表現され、 H に知覚されるまでの過程である。従って我々が言語を通して実体を理解するには、この過程を逆方向にさかのぼらねばならない。

$$R^0 \rightarrow R^1 \rightarrow R^2 \rightarrow R^3 \rightarrow R^4 \rightarrow R^5 \rightarrow R^6 \rightarrow \dots$$

- (5)より $R^6 \doteq R^5$
- (4)より $R^6 \doteq R^4$
- (3)より $R^6 \doteq R^3 + \beta$
- (2)より $R^6 \doteq R^2 + \alpha + \beta$
- (1)より $R^6 \doteq R^1 + \alpha + \beta$
- $R^0 \doteq R^1$ より $R^6 \doteq R^0 + \alpha + \beta$
- $R^0 \doteq R^6 - (\alpha + \beta)$

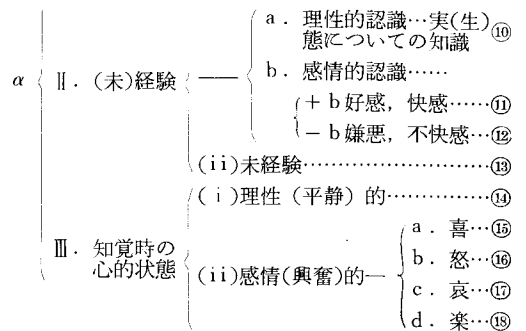
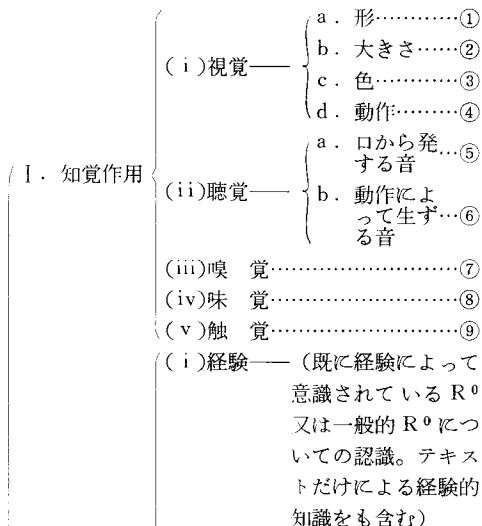
かくして実体 R^0 に近づくには外言語 R^5 を表現ならしめている背景の要素である α と β を解明するより外にない。これは極めて困難で、忍耐を要する仕事であるが、もし α と β とに法則が樹立されれば、言語の本質がある程度まで解明されるのではなからうか。

§ 2 表現過程に関する理論の適用例

§ 1 で述べてきた言語の表現過程に関する一般的理論を具体的な例を挙げて順的に説明してみよう。

1. 実体 R^0 をイヌとする。
2. イヌ R^0 は光の作用で映像として映しだされる。即ち、イヌ R^1 となる。 $R^0 \doteq R^1$
3. イヌの映像 R^1 は視覚器官に知覚像 R^2 (= 視覚映像) として映る。即ち、これは知覚されたことを意味する。 $R^1 \doteq R^2$
4. イヌ R^2 は直ちに大脳に達して、認識像 R^3 に変えられる。 $R^3 = R^2 + \alpha$ であるから、 α の変化に応じて R^3 も変わる。 α は三つに大別され、各々その内容によって細区分される。

α は細区分された上記の18項目から成立っていて、そ



これらのどれかが R^2 と結合して、新しい認識像 R^3 が作りあげられるのである。

例 1

話者 S が知覚したもの——知覚作用

- I—(i)—a : 毛はちじれ気味で、長く、下方に垂れている。眼はやさしそうであるが、長い毛にかくれて輪郭は不明瞭。耳は長く、下方に垂れている。尾は上の方に小さくまるくまいていようである。脚は坐っていて長さははっきりしないが、毛のかたまりのように見える。口先は短い。
- I—(i)—b : 大きさは普通の猫を大きくした程度である。
- I—(i)—c : 薄褐色である。
- I—(i)—d : 婦人の膝に坐って、彼女の顔を見上げている。
- I—(ii)—a : クークーとなっていて、その声は小さく甘えているように聞える。見知らぬ S を見ても警戒さえない。
- I—(ii)—b : なし。
- I—(iii) : S との距離が3メートル以上なのでわからない。
- I—(iv) : なし。
- I—(v) : なし。

話者 S の認識していたもの——(未)経験

- II—(i)—a : イヌというものは S が見た R^1 よりもはるかに大きく、野生的であり、口先が長く、毛は短く、人になつくけれど、抱かれたりすることは嫌がるもので、屋内の床の上で生活するものではない。しかも見知らぬ人が近づくとき、警戒して吠えたり、時に

は攻撃さえしたりして、人に危害さえ与えるものである。Sは以前イヌに追いかけられ、大変不愉快な経験をしたことがある。

Ⅱ-(i)-b : イヌはSにとってどうしても親しむことのできない動物である。イヌを見ると、以前の不愉快な経験を思い出して、好きになれない。又、Sにとって褐色は嫌いな色でもある。

Ⅱ-(ii) : なし。

話者Sの知覚時における心的状態。

Ⅲ-(i) : なし。

Ⅲ-(ii)-a : なし。

Ⅲ-(ii)-b : Sは婦人のところへ来る途中、道路が車で混雑し、予定の訪問時間より1時間も遅れて到着し、いらいらしている。

Ⅲ-(ii)-c : なし。

Ⅲ-(ii)-d : なし。

このような α の条件のもとで、 R^3 はどのように性格づけられた認識像として意識されるであろうか。この場合の R^3 はイヌにもこのような小さな、毛の長い、しかもペット用として飼われ、人の膝に坐り、見知らぬ人を見ても吠えることさえしないイヌがいるのだという新しい知識を加えた認識像として形成される。しかし、イヌはSにとって不愉快なものであり、更に褐色の毛と、気分のいらいらが一層不快さを助長する要素として働いている。おそらく、心の中で「イヌのくせに人の膝なんかに坐ったりして、なんときたならしいんでしょう。それにあの毛の色は見ただけでもぞっとする。あれでもイヌって言うのかしら。本当に今日はいやな事ばかりだこと」とつぶやくであろう。

例2

Sが知覚したもの——知覚作用：例1と同じ。

Sが認識していたもの——(未)経験。

Ⅱ-(i)-a : イヌの大きさには小牛に近い程の大きさのセント・バーナードからネズミより少し大きい程のオモチャ・テリアまでいて、形態上においても、毛の長いものと短いもの、毛の直毛のもの縮毛のもの、口先の短いものと長いもの、耳の立っているもの

とたれているもの、足の短いものと長いもの、尾のたれているものと巻いているものがあり、色も多種多彩である。イヌの性質もその品質によって攻撃型、警戒型、温順型等があり、それによって猟犬として、労働犬として、愛がん犬として用いられていることなどイヌについての知識はかなり詳しい。

Ⅱ-(i)-b : Sは自からイヌを飼う程イヌが好きであり、イヌと遊んでいる時、心が安まる。イヌの種類によって好き嫌いはあるが、総じてイヌは好きである。

Ⅱ-(ii) : なし。

Sの知覚時における心的状態：例1と同じ。

このような α の条件のもとでは、Sにとって R^3 は新しい経験的知識として認識されるものではないが、婦人に抱かれているイヌを見た時、「本当にかわいいイヌなこと、私も抱いてみたい」という気持になり、微笑さえ浮かべながら、今迄の不愉快ささえも忘れ、安らいだ、落ち着いた気持になるであろう。

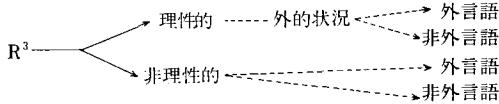
上記の例によって明らかのように、 α のⅠ、Ⅱ、Ⅲにおいて起り得べきあらゆる可能性を実例に基いて設定し、そこから生ずる R^3 の実例を可能な限り収集すれば、 α によって生成される R^3 はかなり正確な程度にまで機械的に導き出されるであろう。

更に重要なことは、ⅠとⅢはいずれも観察時における事柄であるが、Ⅱは反対に、既に経験され、獲得された個人的知識である。従って、Ⅱにおいては観察者の学習範囲とその程度、および知識を与えた社会の性格と知識そのものの方向性が明らかになる。この事は、即ち、観察者の生活絵図とそれによって獲得された感情的性格をも表わしていることを意味している。

これらの知識は内言語として記憶されているものであり、観察者の感情的認識も、知覚対象の特性も、更に知覚時における心的状態も、完全ではないがある程度まで言語で説明可能である。もしそうでなかったら、どうして思考などあり得ようか。思考とは言語によってのみなされるものであるからである。従ってこの R^3 は内言語によって、対自的、私的、個人的なものとしての像として形成された認識像である。

5. この R^3 が外言語としての形態をとる前に話者Sの性格およびその場における心理状態によって二つの

方向をとる。即ち、理性的と非理性的である。Sが理性的であるということは話す相手(=聞手)と、話す場等を考慮するだけの精神的余裕のあることを意味し、非理性的であることは、他を考慮しない自己中心的性格の持ち主であるか、それとも話す相手や話す場を考慮することが不可能な程の精神的動揺をきたしている場合である。前者の場合は外的状況を伴って二つの方向に進むが、後者の場合は外的状況を伴わず、直線的に二つの方向に進む。



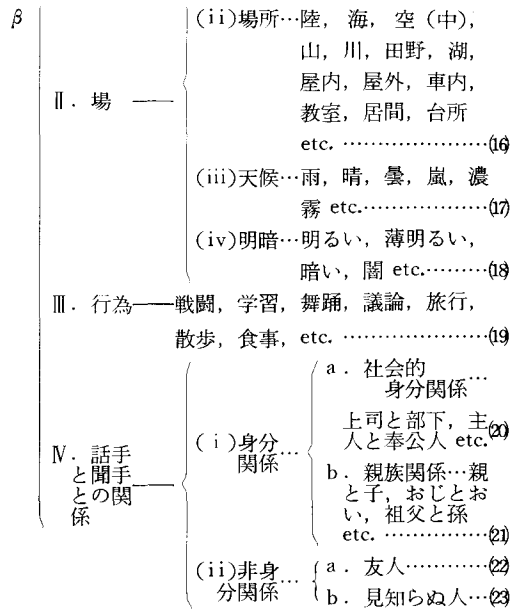
(注「非外言語」とは音声を伴わない言語である)

後者の場合、R³は直ちに非外言語となって表現されるが、非外言語となる時は、怒り、悲しみ、喜び等があまりにも大きすぎて言葉となって表現されず、話者の表情や身振り等によって表わされる場合である。

前者の場合で、Sの理性が働いている場合を考えてみよう。R³が外言語としての形態をとる時、R³は外的状況βによって再び思考され、外言語に最も近い内言語としての像R⁴を形成する。R⁴は外言語の対他的、公的、社会的要素を意識した外言語の準備段階である。

$$R^4 = R^3 + \beta$$

βは次のように4つに大別され、更に23に細区分される。



R⁴は上記の外的状況βが考慮されて形成されたものである。ここに具体的な例を二つ挙げてみよう。

例3

- I-(i)-a : 社会的な名士, 婦人団体の会長
- I-(i)-b : 地方の婦人団体に属し, 住民の福祉向上に努力。家庭の主婦でもある。
- I-(i)-c : 50歳位
- I-(i)-d : 女性
- I-(i)-e : 東京。山の手。高級官吏の娘。
- I-(i)-f : 東京のO女子大学卒業後アメリカに数年間留学, 帰国後実業家と結婚, 三児の母, 地方および中央の種々の団体の幹部に名を連らねている。
- I-(ii) : 身長157 cm程度, やせ型, 顔は長く額は広い, 頬骨が出ている。口は小さい, 鼻は高く, 眼は大きく, 目尻が少し上っている, 知性型のように見える。
- I-(iii) : 髪は美しくアップに整えられていて, 紅葉の模様をした和服を着ている。
- I-(iv) : 社交性に富み, 温厚で, 洋風好み, 犬をとともかわいがる。
- I-(v)-b-イ : 話手と会えて大変喜んでいる様子である。
- II-(i) : 秋, 昼間

- II-(ii) : 豪華なソファーが具えられ、高価な絵画や、美しいジュータンのある居間。
- II-(iii) : 快晴。
- II-(iv) : 快い明るさ。
- III : ソファーに坐って、テレビを見ながら犬の毛をすいている。
- IV-(i)-a : 婦人団体における会長と会員という関係にある。

外的状況 β が上記のような場合で、しかも α が例 I をもつ R^3 の場合、話手 S は不愉快さを隠して「まあ、とてもかわいらしい犬ですこと／＼犬についてはよく存じませんが、世界でも名のある犬でございましょう？毛の色艶もよろしいし、私もこんな犬を飼ってみたいものですわ……」などと微笑さえ浮べてお世辞を述べるであろう。

例 4

- I-(i)-a : 労働者。
- I-(i)-b : 衣料店の売り。
- I-(i)-c : 25才。
- I-(i)-d : 女性。
- I-(i)-e : 地方の貧困な零細農家の出身。
- I-(i)-f : 高校卒業後関西のデパートに就職、長続きがせず、勤務先を転々と変えて、この店に数日前に雇われた。
- I-(ii) : 身長は 150cm 程度、やせ型、顔はほそ長く、額はせまく、眉は上り眼に平行して、眉墨で描かれ、眼と眉の間はアイ・シャドーで薄青くぬられ、眼の縁はアイ・ラインで黒く縁どられていて、長いつけまつげが人形のように付けられている。鼻は低く、肉づきは薄く、先は上向きで、鈍角三角形のように裾が広がっている。口唇は厚く、真赤な口紅がぬられている。口は小さい。歯並は不規則で、歯の色は薄黄色がかっている。顔色は青白い。髪は幾分かちれているが、手入はよくなされている、短くカットされている。
- I-(iii) : 洋服はその店のお仕着で紺色のスーツを着ている。
- I-(iv) : あきつぱく、自分勝手に、仕事に対する情熱がない。おしゃべりで、ハ

デ好きで、犬や猫を特にかわいがる。人の注意を引くような振まいを度々する。

- I-(v)-b : 話手に突然自分の怠慢な行為を見られて、気まずい思いをしたが、挨拶もせず、謝ることもせず、ふてくさって、不気嫌な態度であった。
- II-(i) : 12月年末、夕方。
- II-(ii) : 店の二階にある従業員の 6 畳の部屋、汚れた壁には流行歌手の写真がはられてある。やぶれかけの畳、黒くしみついたフツンのかけてあるコタツ、雨水で朽ちかけた窓枠、すすよごれた窓ガラス、薄いベニア板の天井、使い古るされた整理ダンス、張紙の多い襖。

- II-(iii) : 小雨、はだ寒い。
- II-(iv) : 薄暗い蛍光灯の光。
- III : コタツに入って、テレビを見ながら、犬の毛をすいている。
- IV-(i)-a : 店の女主人と従業員の関係。

外的状況が上記のような場合で、しかも α が例 I をもつ R^3 の場合、話手 S の気分は一層不気嫌になり、「この忙しい年末に仕事もせず、油を売って、犬なんか抱いて、テレビなんか見るなんて、一体どういうつもりだ。あんた給料もらっているんでしょ／＼……なんてきたない犬でしょう。外におっぼりだして、部屋の中には入れないで／＼……」などと大声をあげて、叱責するであろう。

6. これらは単なる一例に過ぎない。 β の各々の項目は聞手によって、場によって、行為によって異なるから、それに応じて R^4 も異なる。このように β に基いて考慮された R^4 は、外言語 R^5 となって表現される。 R^5 には明確に資料として収集でき得る客観的言語事実——言葉、統語、口調、意味等——が存在する。同時に、この客観的言語事実には話手 S の生活が象徴化されて表現されているとも言える。何故なら、 R^5 は S が従来 R^0 をどのように認識していたか、更に β をどのように判断したかが凝縮されて、外言語という明確な形態をして、象徴的に表示されているからである。この意味で R^5 は話手の全人格的表現とも言えるのである。更具体的に言えば、S の生活の形象的反映であり、S の個性の具現である。ここに言語研究の一つの課題がある。それは R^5 を構成している

選択された言語とその意味、統語、強勢、抑揚、リズム、口調等によって、Sの生活形態の歴史を究明することである。

7. 外言語化されたR⁵は聞手Hに到達する直前に諸抵抗に会って、変化音R⁶となる。

8. 変化音R⁶がHに知覚されて、聴覚映像R⁷ができる。

9. 聴覚映像R⁷は大脳に達して、認識像R⁸がつくられる。この後の進行過程はSの場合と同様なので、省略する。

以上をもって、言語の表現過程に関する説明は一応終りとするが、最後に、話手Sが表現するものと、聞手Hが知覚して理解するものとの、先づ、あるいはそれに近い程度に一致している必要があることを付加しておく。即ち、言葉とその意味するもの、統語、強勢、抑揚、リズム、口調等に関しての相互理解が両者間において前提条件となっていなければならない。これを可能ならしめているものが言葉の法則——文法——と呼ばれているものである。この意味で言語とは特定の社会における一つの制度であり、規律であり、誰もが勝手に変更でき難い約束事であると言われるのである。

以上、言語表現の過程に関する理論とその適用例を述べてきたが、今後これに基づいて言語研究および文学研究を進めて行きたいと思う。

参 考 書 目

チモフェーエフ：東郷正延訳「文学理論」(1)、(2)、青木書店、1954。

Edward Sapir: *LANGUAGE.—An Introduction to the Study of Speech*, New York, 1921.

稲村耕雄：「色彩論」，岩波書店，1955。

Ernst Leisi: *DER WORTINHALT SEINE*

STRUKTUR IM DEUTSCHEN UND ENGLISCHEN, Quelle & Meyer, Heidelberg, 1953

(鈴木孝夫訳「意味と構造」研究社)

Ferdinand De Saussure: *COURS DE LINGUISTIQUE GÉNÉRALE*

(小林英夫訳「言語学原論」岩波書店)

Francis Baud: *PHYSIONOMIE ET CARACTÈRE*

(山崎清訳「容貌と性格」白水社)

月刊「言語」, Vol. 1 No. 6, 大修館書店, 1972.

Jean Maisonneuve: *LES SENTIMENTS*

(山田悠紀男訳「感情」白水社)

John B. Carroll: *LANGUAGE AND THOUGHT*

Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey, 1964 (詫摩武俊訳「言語と思考」岩波書店)

小林英夫：「言語学通論」改訂第7版，三省堂1972。

近藤耕人：「映像と言語」，紀伊国屋書店，1965。

Leonard Bloomfield: *LANGUAGE*, H. Holt and Co., New York, 1933.

三浦つとむ：「認識と言語の理論」第一部，第二部，勁草書房，1967。

Otto Jespersen: *THE PHILOSOPHY OF GRAMMAR*, London, George Allen & Unwin, 1924.

Paul Chauchard: *LE LANGAGE ET LA PENSÉE*

(吉倉範光訳「言語と思考」白水社)

Pierre Guiraud: *LA STYLISTIQUE*

(佐藤信夫訳「文体論」白水社)

時枝誠記：「国語学原論—言語過程説の成立とその展開—」，岩波書店，1941。

魚返善雄：「言語と文体」，紀伊国屋書店，1963。

山内得立：「意味の形而上学」，岩波書店，1957。